
ハッピーパラダイス

ユー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハッピーパラダイス

【Nコード】

N2791Y

【作者名】

ユ一

【あらすじ】

機械の代わりに魔法文化が発達した異世界「アーク」
モンスター・獣人・龍人・精霊・人間などの多種多様な生物が暮らしているその世界とあるギルドが名をあげていた
その名は「楽園の巨塔」

ギルド系王道？ファンタジーです

激下手はご愛嬌（苦笑）

魔法説明？

魔法

階級

低級<中級<上級<超級<神罰級
ちなみにそれぞれの階級の難易度は一つ下の階級の魔法を同時に5種類出すのと同じレベル

属性

火<水<雷<土<風<火

魔法一覧

純粹魔法

一属性の魔力のみで攻撃する魔法
火の球や放電等

属性付加

物質に魔力の属性を付加させる事で攻撃に特徴を付ける魔法
単純な例

火：熱や光で攻撃が出来るようになる

水：水での目眩ましや防御能力の向上

雷：攻撃の加速や痺れ等の身体異常

土：純粹な硬質化と重量の増加

風：切れ味の強化や遠距離斬撃

騒がしいギルド

ハア…ハア…

暗い森を抜けた先にその街はあった

「ここが…」

街に入った瞬間に全身で感じる熱気や活気。

その全てが気にならなくなる程の堂々とそびえ立つ巨塔

「あれが楽園の巨塔…」

最近急に名を上げたギルド「楽園の巨塔」

俺も名を上げる為にここに来た

ちなみに楽園の巨塔の付近では

盗賊集団突然壊滅したり

竜巻の中心で笑う少年を見たりといった怪現象が目撃されている

若干の不安を感じながら大きな扉を開けると最初に視界に飛び込んで来たのは…

「…樽？」

ガンツ…

「うっ…」

俺はそのまま意識を手放した。

若干の頭痛を感じながら目を覚ますとそこにいたのは…
オールバックの…

「…黒いおっさん？」

「…」

「……」

何故だから睨み合う2人

「…え」と

逃げようかな…

「…」

ガシ…

「…ん？」

背中に違和感を感じた直後

ヒュン

「ヒュン？」

宙を舞う。

「え…」

宙を舞った直後落ちる場所に椅子が滑り込んで来た。

が、本来落下の勢いを殺して座らせる目的だったであろう椅子は鈍い音をたてて俺の背中とぶつかる。

「いきなりなんだよ!？」

うん、これは普通怒るべきだ

つていうかなんで俺は宙に浮いたんだ!？

風属性？いや風は感じなかったし勝手に浮いたみないな感じだった

とか考えていると目の前の床が持ち上がって机のようになった。

「は？」

さらにその光景に驚いていると机の真ん中が更に膨らんで…

小さなおじちゃんが出て来た。

「よっ！」

小さいおじちゃんはこっちを見て笑顔で一言…

「入会を許可する。」

……は？

「まだ何も「言っていないのに」」

なんだこのおっさん

「おっさんは無いだろ？」

また…

「心を読まれるのは気分が悪いか？」このおっさんどうやって…
そんな魔法聞いたことも…

「内緒。」

おっさんの笑顔って気持ち悪いな…

「…」

おっさんは涙目だ。っていつかこのおっさんは誰なんだろうか。
妙な力を持つてるし…

此処まで考えてから気付く。

「おっさん本当に人間か？」

「気付くのが遅い五点減点。」

ハツと後ろを見るとスーツ姿で黒い長髪の男が経っていた。

「それは俺だ」

意味の分からない事を言う男を眺めていると男が一言

「解」

後ろを振り向くとさっきの小さなおじさんは土になっていた

土人形つてあんなに精巧に出来るもんなのか…？

振り向くと男は人差し指を立てて一言。

「内緒。」

「あつそ」

返事を期待した俺が馬鹿だった。

「何だかごちゃごちゃしたが…」

唐突に男が話出す

「正式に、楽園の巨塔への入会を許可する。」

「え…審査とか「面倒くさい」」

キリツとした顔で言う事ではないが気にしないでおこう

「まあ書類は一応書かなきゃいけないけどな…」

と言われて一枚の紙を渡された

記入欄は、名前と身長と使用武器…だけ

「はい」

「えっと…リオン・ミルキーくん？」

「はい」

「じゃあギルドマスターの所に連れて行くね」

笑顔で放った一言がリオンに疑問をもたらした

「あんたがギルドマスターじゃないの？」

「俺は新人」

親指を立てる姿に呆れて一言

「じゃああなたの許可とか最初から「いるよ?」「」

「新人なのに?」

「ギルドメンバーの紹介が入会条件だからね」

「…なるほど」

その時男が俺の腕を掴んで指を鳴らした

…瞬間景色が切り替わる。

明るくて広い部屋で目の前には誰もいない机が一つ

「今のは…「転移、超級空間魔法の一つだよ」」

「そんな事は分かってるよ」

意味が分からない…

詠唱破棄した超級魔法は普通ギルドマスタークラスじゃないと使えない筈

それをいとも簡単に使える

こいつ新人とか言いながら実質かなり強いのか？

「俺は下から2番目だよ」

「何人中？」

「確か〱260人くらいかな？」

うん…意味分かん

そりゃこのギルド有名になる筈だわ…

「ちなみにギルドマスターは毎年ギルドで一番強い人間が勤めます」
うん俺無理。

その時再び視界が切り替わる

「…え？」

今回は男も慌てている

「ヤベ…解散!!」

「え？」

そう言われた時には男は消えていた。

解散…って言われても…

こうして俺のギルド初日は振り回されるだけ振り回されて終了した。

「…あ」

「アリスちゃん…」

ファーストクエスト

目を覚ますと周りには荒野が広がっていた。

「何だここは？」

俺は地面に横たわっている

「夢…か？」

目の前には嵐が吹き荒れ、

その中にはつきり見える白くて大きな…

「…龍？」

その姿を最後にまばたきと共に景色が変わる

…

目の前には机。

昨日寝る所が見つからなくてギルドで寝ていたのを思い出す

「…何だっただんだ？あれ…」

確実に見たことが無い上に夢にも関わらずはつきりと覚えている

ほぼリオンの勘だがあれはモンスターではない。

モンスターとは今まで見た物も聞いた物も全て醜く、龍のような洗練された姿を持つ物など知らない

リオンの記憶には一つの種族が浮かんでいた

「…龍人？」

浮かんだと言ってもリオンは龍人を見たことが無い

しかし、文献で読んだ事もある、旅人の話でも何度も聞いた
その結果勘で断言する。

あれは龍人だ。

「…綺麗だったな。」

夢であつてもはつきりと嬉しいと思う。

それほどに夢の中にいた龍は美しかった

「…よっ！」

昨日の黒スーツ襲来。

今のリオンの状態を表すなら

ビクウウウウ！

だろう

「…え？」

リオンは戸惑っている！

黒スーツの攻撃！

ほほつねり！

リオンのダメージ！

「…いつからいたんだ？」

うん、きつと俺は今怒るべきだった。

「最初から。」

そして今も俺は怒るべきだ

…ゴン！

「声かけるよ！」

「痛いんですけど〜！」

「知らんわ!」

「いや、流石にまさかお前に独り言癖があるとは知らなくてな……」

黒スーツはニヤニヤしている!

リオンの心に10のダメージ!

「……」

ヤバい……今の俺凄くハズい……

「見れば分かるよ。」

黒スーツが心を読めるのを忘れていた……

黒スーツは再びニヤニヤしている!

リオンの心に20のダメージ!

リオンの心が折れた!

「……もうだここ……」

「まあそう嘆くな。」

そう励ます黒スーツはニヤニヤしている

ここで黒スーツを見ていたリオンはある事に気づく

「そついえばさ……」

「ん?」

「名前何?」

「……」

「……」

「……言っ
てなかつた?」

「うん……」

「ミツク……ミツク・ゲイルだ」

「ミツクミツクゲイル?」

リオンはニヤニヤしている

「ミツクゲイルだ」

「ミツクって二回言っ
てなかつた?」

リオンはニヤニヤしている

「……」

「……」

しばしの沈黙…

「…格好付けたただけだ文句あるかああ!!」
ミツクの心が壊れた!!

「五月蠅いぞゴミ屑が!!」
グシヤッ

ミツクの頭が消える。

そして代わりに女性の顔が目の前に現れる。

「全く…出るタイミングくらい作らんかど阿呆が!!」

「…すみません」

ミツクの最後の言葉が謝罪とは。

とりあえず手を合わせておこう

ここで女性が一言

「…ん、何してる？新人」

「黙祷。」

女性は笑い転げている

ミツクは立ち上がった

「マスター、いじるのはそろそろ止めて下さい…」

「おうそうだな」

「え…」

「…どうした？」

「…あんたが…マスター？」

「なんだ聞いてなかったのか？」

私が楽園の巨塔ギルドマスター

アーク・ライムだ。」

ギルドマスターって…

「…あんたなの？」

「今言っただろう。」

「…って言うか…」

「何しに来たの？」

タイミングがどうか言っていたから俺に話があるのかもしれない…

「…意外と勘は鋭いな。」

そういうとマスターはニッコリと微笑んだ後一言。

「これよりリオン・ミルキーに最初のクエストを言い渡す。」

ここからリオンの世界は加速する…

「とりあえず寝床見つけさせて下さいよ」

…加速するはず。

不思議と気持ち悪さしか生まれぬ

「…無理…我慢出来ん!!」

「ホキヨ!!!」

ミックが気持ち悪さに負けたのか魔法を使おうとする…が二体の武者首ジェットの突進に阻まれる。

武者首ジェットは地面に突き刺さり…地面を掘り進んで別の所から飛び出す。

この間約3秒。

素早く、迷惑で、気持ち悪い

武者首ジェットにいい印象を持つ者はいないだろう。

「リオン…」

「こんな時に何?」

「お前の出番無くなってもいいか?」

「最初からなくていいよ。」

「武者首ジェット…特別に俺の樹海魔法で殺してやる。」

ミックはそう呟くと両手を武者首ジェットにかざし魔法の詠唱を初める

「母なる大地よ、今我に炸裂の巨塔を貸し与えよ…「バベル!!!」」

次の瞬間前方から直径10メートル程の大樹が高速で突き出し、爆発した。

「ホキヨ…」

武者首ジェットは跡形もなく吹き飛んだ。

「…よし、帰るか」

「まで…」

俺はミックの肩をしっかりと掴む。

「ん？どうしたリオン」

「…樹海魔法って何？」

「…合成魔法を知らないのか？」

「何それ？」

なんだか良く分からない名前が出て来た

合成魔法？

「聞いた事もない。」

「そうか…」

ミックは少し首を捻った後

「マスターに聞け」

とだけ言った。

「…了解。」

こうして俺の初クエストは一切俺の出番の無いまま終了した。

「…報酬貰えるかな。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2791y/>

ハッピーパラダイス

2011年11月22日02時56分発行